

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤズィックアグルの蒼い空 7 白き峰ヤズィックアグル 2

12:35、ヘイカ峠(4830m)を通過。一気に登り上げる九十九折りの道路は上から眺めると芸術的とも言える景観である。周囲の山々はいずれも6000mを超えているが、そのすべてが手つかずの峰である。ここから30分ほど下った地点が昨年引き返さざるを得なかった道路決壊現場。今年はなんとか通ることができたが、いつ洪水が起こってもおかしくない場所だ。そんな箇所が沢を横切るたびに何度も出現する。峠を越えたので、脇を流れる川は水系が変わり、下流でホータンを潤しているカラカン河の支流となった。

13:45、和平橋という橋のたもと道の道班(日本で言う道路公団の事務所)を過ぎたところでナン、スイカ、ハミ瓜で昼食を摂る。BCまではここからまだ180km、まだまだ道のりは遠い。スイカをほおぼっていると、ヌルさんから、「この先の三十里営房から大紅柳灘までは一切の撮影禁止、停まることも許されない。」との注意があった。7~8年ほど前にこの地域の奥で登山活動を行なった京都大学隊の報告書などを読むと、大紅柳灘の招待所をベースハウスとして使わせてもらったという記述もあったが、とにかく今は駄目という以上、頼むわけにもいかない。デリケートな部分もあるので、言われた通りにするしかあるまい。その三十里営房も大紅柳灘も想像以上にどでかい兵站であった。和平橋(なんと、中国的なそして現実感のない命名!)を出て緊張しながら三十里営房を通過したのは、およそ45分後の15:15。集落を抜けて5分ほど進むと大きな建物が現れた。「あれはなんの工場だ」とカメラを向けたのは、カメラ小僧を自称する松田さん。その瞬間、助手席に座っていた連絡官の藩さんが「カメラはやめてください」と一言。その場はそれで過ぎたのだが、夜BCで食事を終えた後、その写真については、藩さん、ヌルさん立ち会いの下、しっかり消去された。昔ならフィルムを抜き取られ、1本まるまる駄目になってしまうところだが、今はデジカメ、確認してその部分だけの消去でよかった。おとがめなしはもちろん、その程度で済んでよかった。

三十里営房の先標高3700mの地点には集落があり、この高地にビニールハウスが何棟も建っていた。藩さんの説明では2006年よりこのハウスで野菜が作られるようになったとか。やはりこれも国境を意識した既成事実の積み重ねの実績の一つだろうか。あたりは川こそ流れているものの、緑はほとんどない。そんな場所、こんな高さでの農業にはかなりびっくりさせられた。車は再び徐々に高度をあげ、カンシワ峠(4240m、カルギリクから430km)を越えた。地図によれば、右手を流れる川は、我々の目指すヤズィックアグル峰を主峰として聳立するアクサイ山群の北面から流れ出るアクサイ河である。17:45我々は山群の南面に回り込むべくそのアクサイ河を仮設道路を通過して渡った。いよいよ目指す山の山懐に入ってきたのである。アクサイ山群は予想以上に大きい。そこから大紅柳灘までは、さらに1時間かかった。実は、昼食休憩のあと、車は一度も停まることはなかった。昼食にスイカを食べた身にとって、この4時間以上のダートの走行は拷問に近い。何がって、膀胱は破裂寸前なのである。アクサイ河を渡るころには脂汗が出てくる始末。背に腹は変えられないと、大紅柳灘の手前で「車を停めてもらえ

ないか？」と頼むと、「僕もです。でもここでは停まれません。もう少し待って。」と藩さん。結局、大紅柳灘を越えて 10 分くらい進んで軍の施設が全く見えなくなったところようやく僕の破裂寸前の膀胱は解放されたのだった。

さて、国境近くのデリケートな地点を通過してしばらく進むと、ぼくらの目は深く切れ込んだ谷の先に神々しく白い衣裳をまとって聳え立つ美しいピラミッドに釘付けになった。ついに久恋のヤズィックアグルと対面したのだ。はじめて僕らの前に姿を現したその美しい姿は、登攀意欲をそそると同時に、簡単にはいかないぞという思いを強く抱かせた。登るに値するすばらしい山容にみな興奮している。遅れているトラックを待つ間に、ヌル、藩、大西の 3 人で BC 予定地まで偵察に入る。ヤズィックアグル南面氷河から流れる大きな沢を 4530m の地点までジープで登り詰め、山を正面に望む地点を BC として定めた。21:00 薄暮の迫る中、BC の設営完了。

ミーティングで隊長が「何人かの高度障害はあったが、全員で BC 入りができた。予想以上に手強そうだが、しっかりルート工作して登頂したい。」と言った。やはり同じ印象をもったようだ。さて、BC ができたところで、これ以後の行動はすべて新疆時間を採用することとした。中国は東西に広いが、標準時は東の外れの北京のそれを採用している。だからずっと西に寄っている新疆では、たとえば昼飯といえだいたい午後 2 時



薄暮迫る中でのBC設営

ころ食べるものというのが、普通である。しかし時計の針が 12 時をさせば、頭ではまだ 10 時ごろの感覚と言うことが理解できるが、実際には時計通りに昼が来たような感じになる。午後 3 時といえば、まだお昼休みのはずなのだが、もう夕暮れが近いような錯覚を覚える。夜は夜で、午後 9 時といってもまだ日は高く、10 時になってようやく薄暗くなるというのが現実だ。だから、新疆では非公式ではあるが 2 時間遅れの新疆時間というローカルタイムを使っていることも多い。このズレは時

差惚けともいえないが、微妙に感覚を狂わせ、登山にも影響を与えること必至である。そんなわけで、今後登山活動をしていく上で、太陽の動きの実感にあわせるために、新疆時間で行動しようということを申し合わせた。というわけで、これまでは中国時間で記述してきたが、これ以降この拙い紀行文の中でも、時間は特に注記がないかぎり、日本時間より 3 時間、中国時間より 2 時間遅れた新疆時間で表示する。・・・ともあれ、ヌルさんにここまで連れてきてもらった。これからはよいよ僕らの仕事が始まる。

7 月 23 日朝 6 時、藩さん、南保さんを乗せて、車が帰る時刻になった。昨日の夜ヌルさんから、藩さんにはお世話になったので「チップ」を渡してくださいと耳打ちされた。

「いくらくらい渡せばいいのか？」と聞くと「その額は 5000 元 (約 65000 円)。とりあえず 3000 元、成功して帰ったら 2000 元お願いします。」とのこと。元々中国にはチップという習慣はないはずなのだが、今回は様々な場面でこの「チップ」が要求された。藩さんが何をしてくれたかといえば、登山許可書の発行と高い登山料を安くしてくれたこと。連絡官として、登山隊に同行し、BC に待機しているならまだしも、BC に来たその足でとんぼ返りで、チップまでということでは、理不尽だが、それも含めて総合的に登山料金と考えて納得するしかない。ここは未だに袖の下が通用する国なのだ。トラックも含め 4 人のドライバーにも 1 日 100 元計算でチップを渡した。